

「相互扶助」で信頼築く

この約30年、国内にとどまらず、世界各地で自然災害が相次いだ。国際医療NGO「AMDA（アマダ）」（本部・岡山市）に登録する医師や看護師らは、「救える命があればどこへでも」のスローガンのもと、国内外の被災地で緊急救援活動を進めてきた。AMDAグループ代表で、医師の菅波茂さん（72）が人道支援のあり方について語ってくれた。

AMDAには世界中に約30の支部がある。災害や紛争が起きれば、事前に登録している国内外の医師や看護師ら約570人の中から必要な人数を現地に派遣して、医療や保健衛生などの緊急救援を展開している。

語る

平成から令和へ ⑧

「500人以上が犠牲になった昨年8月のインド大洪水では、AMDAがインドに支部を置いているから、現地でスムーズに活動



「人を助けたいという気持ちは誰もが持っている」と語る菅波さん

「異なる世界で人間力磨いて」

できた。このネットワークがAMDA最大の強みになっている

海外に興味を持ったのは岡山大学で医学生だった頃。小田実さんの著書「何でも見てやろう」に触発されて探検部を作り、アジアを放浪した。

「アジアに関心のある学生と一緒に健康診断にも出かけた。現地の人たちがすごく喜んでくれたのを今でも覚えている」

AMDAを1984年に設立し、カンボジアやルワンダで難民支援などに取り組んだ。95年（平成7年）1月の阪神大震災で被災者支援をした後、同年5月にロシア・サハリン州で起きた大地震の支援に医療チー

ムを派遣した時のこと。現地の人から「帰ってくれ。医師は足りている」と支援を断られた。

「そのときチームの一人が何と言ったか。『4か月前にあなたの国が助けてくれた。お返しをしたい』と訴えた。すると飛行機で800キロ離れた被災地まで運んでくれた」

「援助を受ける側もプライドがある。『あなたが困っているから、助けます』とだけ言えば、相手は受け付けない。『困った時はお互いさま』という相互扶助の考え方が大切。支援する側と支援される側が対等であれば、国際的にも通用することがわかった」

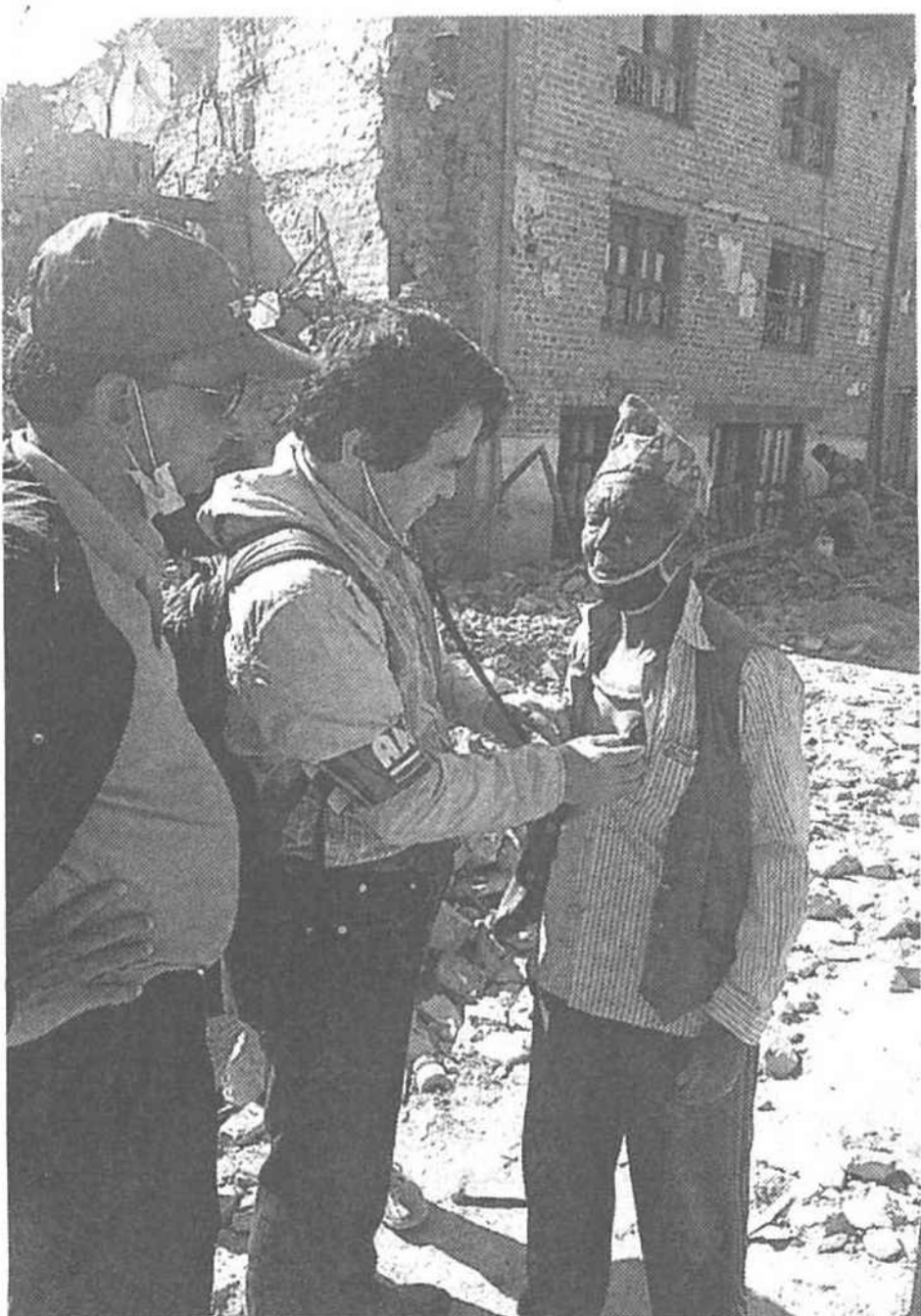
大地震や洪水、サイクロン……。紛争地域の難民キャンプなどにも送り出しており、これまでに約60か国、約200件で支援活動を展開してきた。そんな中で誇れることがある。

「1人の死者も出していないこと。これは、現地事情に詳しい人の指示で動く『ローカルイニシアチブ』を守ってきたから。もちろん、派遣先の国の文化を知り、吸収しようとする姿勢を示すことで、信頼関係を築けたことも大きい」

岡山大で非常勤講師として公共政策について教鞭をとってきた。これからの時代を生きる若者に向けたメッセージは。

「AI（人工知能）が発達すれば、安全と安心の違いが問われてくると思う。安全性は機械で高められ、お金で買うこともできる。だけど安心は買えない。安心は人によって与えられるものだと思う。若い人たちには、他人に安心感を与えられるような存在になってほしい。そのためには、異なる世界に飛び出して、人間力を磨く経験を積むことを大切にしてほしいと思っている」（岡信雄）

1946年、広島県神辺町（現・福山市）生まれ。岡山大学院を卒業後、81年岡山市に菅波内科医院を開業。84年にAMDAを設立した。岡山大で非常勤講師として公共政策などを教えた。2014年からはマレーシアに居住し、海外NGOとのネットワーク構築などを目的に活動している。



2015年に起きたネパール地震の被災地で、巡回診療する菅波さん（中央）＝AMDA提供